

## [個別論文]

# 中学生・高校生の悩みに関する縦断調査

平石賢二・小倉正義・川島一晃  
鈴木あゆ美・高村洋子・堀田愛

1. はじめに
2. 方法
3. 結果と考察
4. まとめと今後の課題

### 【はじめに】

青年期は心身の急激な成長、度重なる学校移行、対人関係の広がりや期待される役割の変化など、様々な変化を経験するなかで、多くの困難に直面し、悩みを抱きやすい発達段階であるときみなされてきた。そして、青年にとってその悩みに向き合い、問題に対処し解決することが発達課題であり、アイデンティティ形成につながっていくと考えられている (Bosma & Jackson, 1990)。

Coleman (1974) は、青年期に直面する課題には、各々直面しやすいクリティカルな時期があるとし、通常、異なる問題は異なる時期に焦点化されるが、青年が同時期に複数の課題に直面する場合には、それが適応上の困難につながりやすいという焦点モデルを唱えている。

それぞれの課題にクリティカルな時期が存在する理由としては、その課題に強く関与している背景要因、例えば、第二次性徴に代表される身体的要因（生物学的要因）や、学校移行、教育カリキュラムといった環境要因そのものに比較的経験されやすい時期が存在するためであることが考えられる。

しかしながら、すべての課題が特定の年齢段階に対応している要因によって影響を受けているとは考えにくい。例えば、学校現場においては、しばしば、「今年の中学1年生は去年とは違ってこういう特徴がある」というように、学年に普遍的な特徴について言及するのではなく、特定の年度の生徒集団の特徴について言及することがある。このことは、年齢要因以外の要因を考慮する必要性を示唆している。

青年が直面しやすい課題や悩みに関する研究は古くから行われてきているが、従来の研究においては横断的研究が多かったため、悩みの内容の経験されやすい発達の時期や個人内変化の様相については十分に検証されてこなかったように思われる。

そこで本研究では、中学生と高校生を対象にして、悩みの内容と程度に関する縦断データを収集し、悩みの個人内変化を指標としながら、悩みの内容毎に①直面しやすい時期は特定できるのか、②変動性に違いはあるのか、③男女差は認められるか、といった点について探索的に検討することを目的とした。

なお、本研究において分析するデータは、もともと、調査対象校における校内相談室が毎年実施している生徒のニーズ調査によって収集されたものを用いた。このデータ収集は校内における相談活動という教育実践に役立てることを第1の目的として行われているものであるが、上記の研究上の目的のために再利用した。また、縦断調査は2004年度から2006年度まで継続されているが、現時点で分析可能である2年分のデータのみを報告することにした。

## 【方法】

### 1. 調査項目および回答形式

悩みの内容と程度：Table 1 に示される14種類の内容について、普段どのようなことで困ったり、悩んだりしているかを尋ねた。回答形式はそれらの内容についてどの程度悩んでいるか「全く悩んでいない（1点）」から「とても悩んでいる（5点）」までの5段階評定である。

### 2. 調査時期および調査対象

第1回調査（T1）：2004年11月に中高一貫校に通う中学生233名（男子115名、女子118名）、高校生326名（男子149名、女子177名）に対して質問紙調査を行った。

第2回調査（T2）：2006年1月に第1回調査と同じ学校の中学生217名（男105名、女112名）、高校生315名（男147名、女168名）を対象に縦断的に質問紙調査を実施した。2回の調査結果に基づく個人内変化を検証するため、分析には第1回調査の高校3年生のデータと、第2回調査の中学1年生のデータを除いた5学年分のデータを使用した。

## 【結果と考察】

### 1. 悩みの内容と程度

悩みの内容毎に、調査対象者全体の悩みの程度について平均値と標準偏差を求めた。Table 1 は T1 時点での平均値の低いものから順に並べたものである。その結果、Table 1 に示される通り、悩みの程度に関するランキングは第1回調査と第2回調査の結果を比較すると「父親とのこと」と「母親とのこと」の順番が入れ違っている以外には、ほとんど違いが認められなかった。

最も悩みの程度が高いものは、勉強、成績、将来の進路といった学業面に関わるものであった。逆に悩みの得点が低いものは、家族、性、対教師関係に関わるものであった。

親子間葛藤や性衝動の統制などは青年期が情緒的に不安定になりやすい根拠としてFreud (1936) やBlos(1962) などの精神分析学派によって古くから注目されてきたテーマであったが、普段の悩みの内容と程度という観点からの本調査の結果はその知見を支持しないものであると考えられる。

## 2. 悩みの程度の男女差

次に悩みの程度の男女差について  $t$  検定を行ったところ、Table 1 に示される結果となった。有意差が見いだされたものはすべてにおいて、女子が男子よりも得点が高いことを示していた。この男女差の傾向は、思春期では女子の方が適応上のリスクを負いやすいとする研究意見（例えば、Simmons & Blyth, 1987）と一致している。

## 3. 男女別にみた悩みの学年差と個人内変化

悩みの程度における学年集団差と個人内変化を検討するために、男女別に悩みの内容毎に悩みの得点に対して、「グループ（5水準）」×「繰り返し（2水準）」の2要因分散分析を行った。その結果、「母親とのこと」、「父親とのこと」、「きょうだいとのこと」、「祖父母とのこと」、「先生とのこと」の5つに関しては主効果、交互作用共に有意差は見られなかった。これらの5つは上述したように、悩みの程度が低いものであるが、学年集団間の差も個人内変化も共に小さいものであることが示唆された。

Fig.1-1 から Fig.9-2 は、主効果または交互作用において何らかの有意差が見いだされた9つの悩みの内容について男女別に、グループ毎、調査時点毎に算出した平均値をグラフ化したものである。エラーバーは標準誤差を表している。また、Table 2 はそれに対応する分散分析の結果をまとめたものである。

以下に各々の悩みの程度について、年齢的にクリティカルな時期、すなわちピークになる時期が見いだせるかどうかという観点から結果を眺めていくことにする。

まずはじめに、「同性の友だちとのこと」に関しては、男子（Fig.1-1）では、Dグループ（高1→高2）の得点が最も高く、Eグループ（高2→高3）との間に有意差が見られている。Cグループ（中3→高1）も中3から高1になり得点が上昇しているため、高1で同性の友だちの悩みが高まる可能性も推測できるが、DグループとEグループの高校2年生時点での得点差が顕著であるため、学年要因以上にグループ要因、すなわち特定学年コーホートの特徴である可能性も否定できない。女子（Fig.1-2）においては、男子と類似した傾向は見られなかった。女子のCグループは中3から高1にかけて有意に得点が低下していた。また、T1時点では中3（グループC）と高2（グループE）の得点差が有意であるが、T2時点では同じ学年間の有意差は見られなかった。

「異性の友だちとのこと」に関しては、男子（Fig.2-1）では、T1で高1（Dグループ）の得点が最も高かった。また、Cグループでは中3から高1にかけて得点が有意に高くなっており、高1が得点の高い時期になっている。しかし、高2においては、Dグループ（T2）とEグループ（T1）で異なった特徴が見られ、同性の友人関係の場合と同様にグループ要因の可能性も否定できない。女子（Fig.2-2）では有意差は全く見られず、男子と共通した特徴は見られなかった。

「部活・サークルのこと」に関しては、男子（Fig.3-1）では、T1時点で高1（Dグループ）の得点が最も高く、中1から高1にかけて学年毎に悩みが増加しているかのように見受けられるが、T2時点ではA、B、Cグループの得点が有意に高くなっており、中2、中3でも得点が高かった。また、Eグループの得点が高2から高3にかけて有意に低くなっているが、これは調査時期においては部活・サークルを引退しているためであると考えられる。女子（Fig.3-2）は、T1時点では

学年間に有意差は見られないが、T2時点では中2（Aグループ）と高1（Cグループ）の得点が高かった。また、男子と共通の特徴として、Eグループの高2から高3にかけての得点の有意な低下が見られた。

「勉強・成績のこと」に関しては、男子（Fig4-1）では、T1時点で高1（Dグループ）が中3（Cグループ）よりも有意に得点が高いこと、Cグループが中3（T1）から高1（T2）にかけて有意に得点が増していることから、高1、すなわち高校進学後に勉強と成績に関する悩みが増大する傾向が示された。女子（Fig4-2）では、T1時点で高1（Dグループ）と高2（Eグループ）が中2（Bグループ）よりも有意に高く、T2時点で高2（Dグループ）が中2（Aグループ）よりも有意に高かった。また、Bグループでは中2（T1）から中3（T2）にかけて有意に得点が増し、Cグループでは中3（T1）から高1（T2）にかけて有意に得点が増した。これらの結果から中学生では2年生で勉強や成績の悩みが低くなるが、中3から高校にかけて悩みは増大することが窺われる。この傾向は男子と類似したものであった。

「将来の進路のこと」に関しては、男子（Fig5-1）では、T1時点で高1（Dグループ）が中1（Aグループ）、中2（Bグループ）よりも有意に得点が高く、高2（Eグループ）は中1（Aグループ）よりも有意に得点が高かった。また、Aグループにおける中1（T1）から中2（T2）への得点の上昇、Cグループにおける中3（T1）から高1（T2）にかけての得点の上昇、Eグループにおける高2（T1）から高3（T2）にかけての得点の低下が有意であった。これらのことから、中学生から高校生にかけて徐々に将来の進路に関する悩みが増大し、高2から高3にかけてはその悩みは低下することが窺われた。類似した傾向は女子においても見いだされた。女子（Fig5-2）ではT1時点で高1（Dグループ）と高2（Eグループ）が中1（Aグループ）と中2（Bグループ）よりも有意に得点が高く、T2時点では高1（Cグループ）と高2（Dグループ）が中2（Aグループ）よりも有意に得点が高かった。また、Cグループにおける中3（T1）から高1（T2）にかけての得点の上昇とEグループにおける高2（T1）から高3（T2）にかけての得点の低下が有意であった。

「心の状態のこと」に関しては、男女共にグループ要因の主効果のみ有意であった。男子（Fig6-1）ではDグループの得点が、AグループとEグループよりも有意に高かった。全体として中学生から高校生になるにつれて心の状態に関する悩みが増大する傾向が窺われるが、高2から高3にかけては転換点であるかもしれない。他方、女子（Fig6-2）では、Bグループは、Cグループ、Dグループ、Eグループよりも得点が有意に低かった。また、AグループはEグループよりも得点が有意に低かった。これらのことより、男子同様に中学生から高校生になるにつれて心の状態に関する悩みが増大する傾向が窺われる。

「性格のこと」に関しては、男女で異なった特徴が見られた。男子（Fig7-1）では、Dグループが他の4グループよりも有意に得点が高かった。また、繰り返しの要因の主効果が有意であり、T1時点からT2時点にかけて得点が増した。しかし、女子（Fig7-2）においてはグループ間の得点に有意差は見られず、繰り返しの要因の主効果のみ有意であり、T1時点からT2時点への得点の有意な低下だけが見いだされた。男子ではDグループの得点が高く、性格については高1から高2にかけて悩みが高まることも予想できるが、CグループのT2（高1）とEグループの

T1（高2）の特徴からその仮説は支持しがたいと考えられる。

「身体の調子のこと」に関しては、男子（Fig.8-1）では主効果、交互作用のいずれにおいても有意差は見られなかった。女子（Fig.8-2）では、Eグループの得点がAグループ、Bグループ、Cグループの得点よりも有意に高かった。女子の場合には、高校2年生から3年生にかけて身体の調子に関する悩みが増大する可能性も考えられるが、この点についても特定学年コーホートの問題とも考えられる。

最後に「性に関すること」については、男子（Fig.9-1）ではグループ要因の主効果のみ有意であり、Dグループは他の4つのグループよりも有意に得点が高かった。女子（Fig.9-2）では主効果、交互作用共に有意差は認められず、男子とは異なった結果を示していた。

以上の分析結果より、男女に共通して悩みのクリティカルな時期が見いだされたのは、「勉強・成績のこと」、「将来の進路のこと」、「心の状態のこと」の3つであった。前者の2つはいずれも学業に関わることであり、教育制度上の問題という環境要因が強く関与している可能性が考えられる。中学生に比べて高校生は学習内容の難易度が上がり、なおかつ、成績次第では留年の可能性も出てくるという意味で学習上の心理的負担は大きくなっていることが想像できる。また、本研究における調査対象校は中高一貫校であるため、進路選択の課題は中学生よりも高校生において深刻であることは容易に想像できる。これらの状況はほとんどの生徒に対して同じような意味を持つために、それがデータに反映されたのではないかと考えられる。

「心の状態のこと」においても男女共に中学生よりも高校生で悩みが増大する傾向が窺われたが、これは環境要因だけではなく、心理社会的発達の影響も考えられる。「心の状態」について悩むことは、青年の視点が自らの内面に向かうことと関連している。落合（1989）は孤独感研究の中で高校生は個性への気づきが生まれる転換点であることを指摘している。個性への気づきは、青年の視点が内面化していることの証である。また、Harter（1986）は、青年期前期から中期にかけては自己の属性は分化し対立と葛藤が生じることを指摘しており、このことも高校生において心の状態に関する悩みが増大することと関連があると思われる。しかし、他方で自己のテーマに関連していると考えられる「性格のこと」については、特定の傾向が見いだされていないため、それぞれの悩みに関与している要因は単純ではないかもしれない。

続いて述べておきたいのは、対人関係の悩みである「同性の友だちとのこと」、「異性の友だちとのこと」、「部活・サークルのこと」において、悩みの程度に関するクリティカルな年齢段階が見いだせなかったことである。本研究における調査対象校は中高一貫であるが、高校は他の中学校からの入学生が合流してくるため、新たな出会いに伴う適応の課題があることが推測できる。また、同性同年代の友人関係に関しては、いじめや不登校の実態などを考慮すると前思春期から思春期（青年期前期）にかけて困難さが増すことが指摘されているため中学生と高校生との違いがあるのではないかと推測できる。しかし、実際にはデータはそのような特徴を示していなかった。この理由としては、年齢要因や学校移行の要因以上に、集団の凝集性や適合性、リーダーシップなど特定集団のもつ様々な人間関係のダイナミックスが関与してくることが考えられる。また、異性関係に関しても、年齢と共に異性関係が進展し、同時に異性に対する悩みも増大する可能性が考えられたが、単純な直線的関係ではないことが示された。

Table 1 悩みの程度の平均値, 標準偏差および男女差

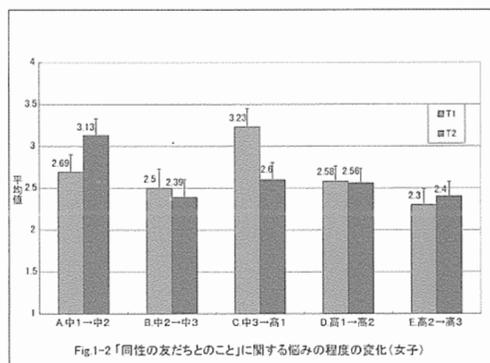
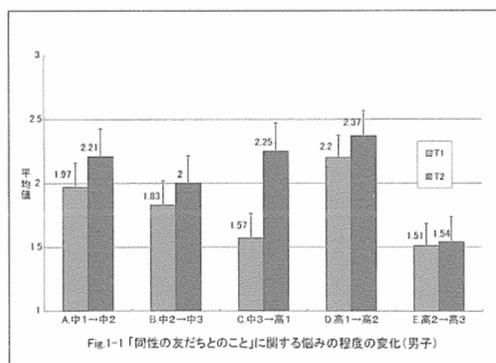
悩みの内容	T 1		T 2		男女差 (t 検定)	
	Mean	SD	Mean	SD	T 1	T 2
祖父母のこと	1.65	.98	1.65	.97	n.s.	女>男*
性に関すること	1.83	1.04	1.76	.96	n.s.	n.s.
きょうだいとのこと	1.85	1.04	1.80	1.00	n.s.	n.s.
先生とのこと	1.90	1.02	1.87	1.01	n.s.	n.s.
父親とのこと	1.94	1.11	1.99	1.14	女>男***	女>男*
母親とのこと	1.97	1.19	1.96	1.13	n.s.	n.s.
異性の友だちとのこと	2.23	1.21	2.31	1.26	女>男**	n.s.
身体の調子のこと	2.25	1.29	2.32	1.33	女>男*	女>男*
同性の友だちとのこと	2.27	1.22	2.36	1.20	女>男***	女>男***
心の状態のこと	2.36	1.31	2.38	1.33	女>男***	女>男**
部活・サークルのこと	2.50	1.39	2.47	1.40	n.s.	n.s.
自分自身の性格のこと	2.62	1.35	2.62	1.34	女>男***	女>男*
将来の進路のこと	3.30	1.42	3.41	1.39	女>男***	女>男**
勉強, 成績のこと	3.42	1.30	3.54	1.31	女>男*	女>男*

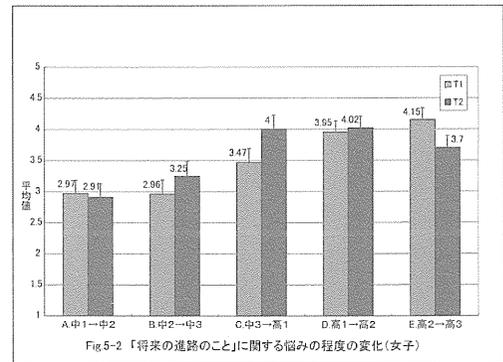
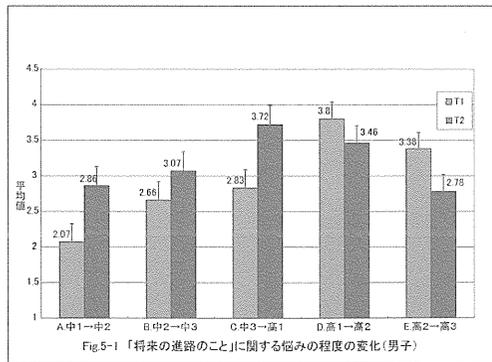
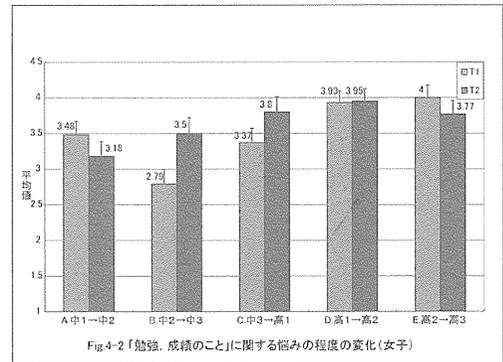
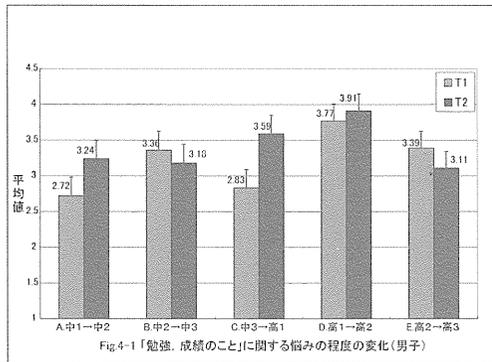
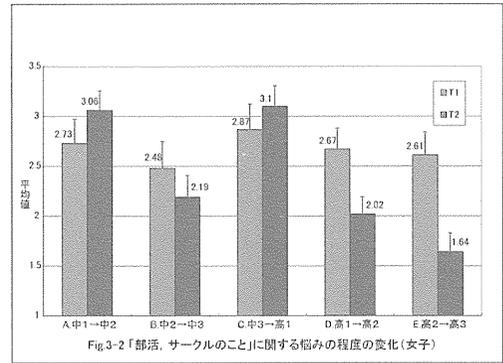
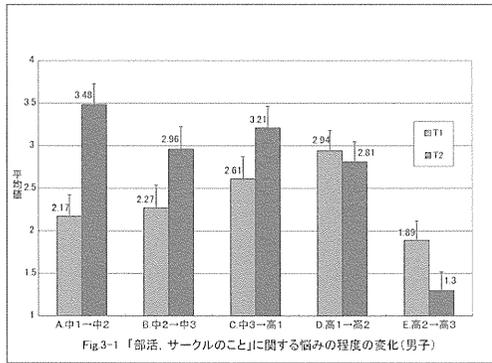
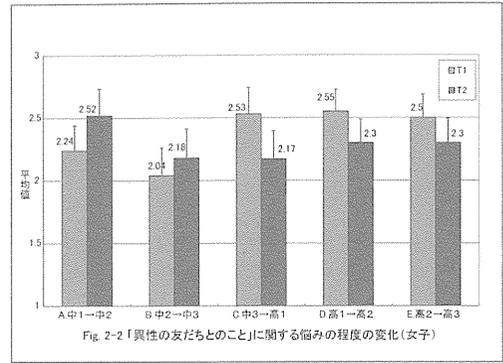
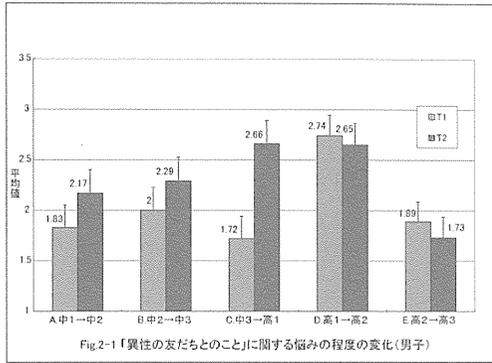
\*:p<.05, \*\*:p<.01, \*\*\*:p<.001

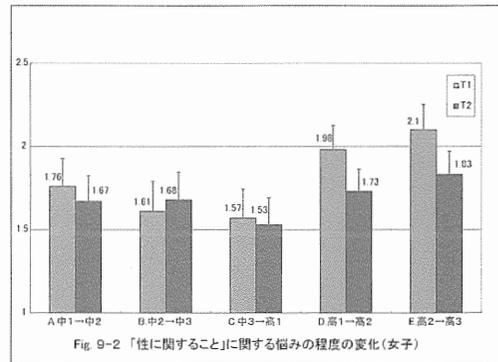
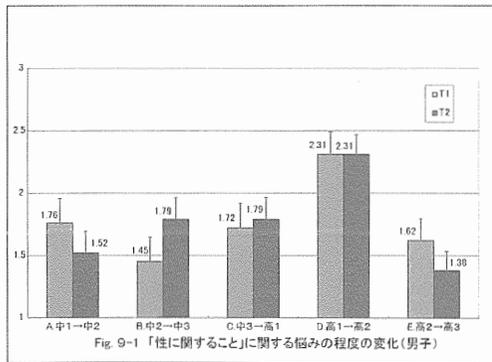
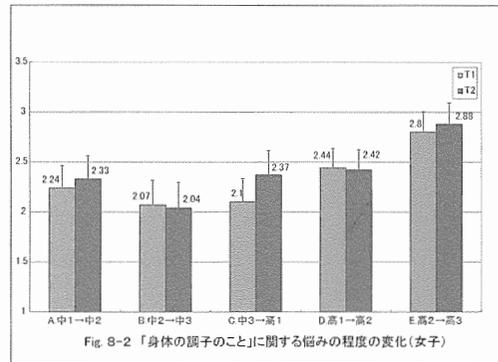
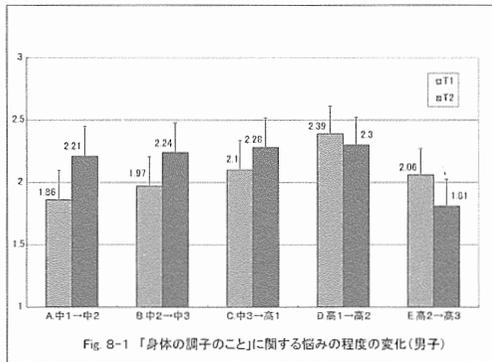
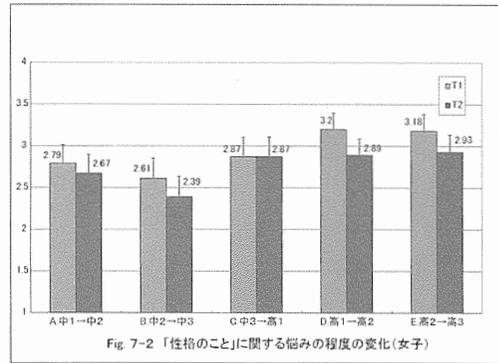
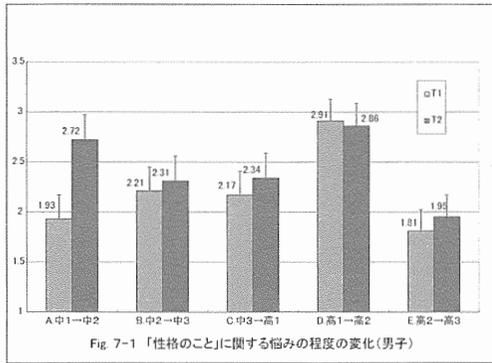
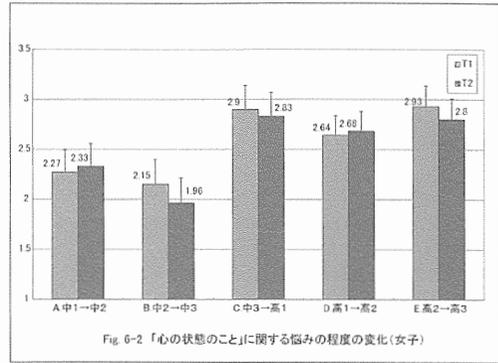
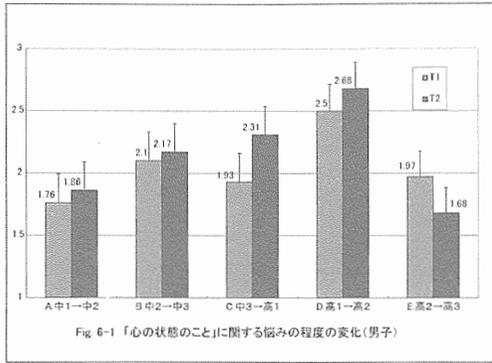
Table 2 2要因分散分析（グループ×繰り返し）および下位検定の結果

悩みの内容		主効果		交互作用	下位検定（多重比較：Tukey, 単純主効果の検定：Bonferroni）
		グループ	繰り返し		
同性の友だち とのこと	男	$F_{(4,151)} = 3.15^*$	$F_{(1,151)} = 7.44^{**}$	n.s.	$D > E^{**}, T2 > T1^*$
	女	$F_{(4,168)} = 2.59^*$	n.s.	$F_{(4,168)} = 2.51^*$	$C:T1 > T2^*, T1:C > E^*$
異性の友だち とのこと	男	$F_{(4,152)} = 3.82^{**}$	$F_{(1,152)} = 5.07^*$	$F_{(4,152)} = 2.83^*$	$C:T2 > T1^{***}$ $T1:D > A \cdot C \cdot E^*, T2:C \cdot D > E^*$
	女	n.s.	n.s.	n.s.	
部活・サークルのこと	男	$F_{(4,147)} = 8.53^{***}$	$F_{(1,147)} = 9.69^{**}$	$F_{(4,147)} = 8.10^{***}$	$A:T2 > T1^{***}, B:T2 > T1^*$ , $C:T2 > T1^*, E:T1 > T2^*$ $T1:D > E^*, T2:A \cdot B \cdot C \cdot D > E^{***}$
	女	$F_{(4,164)} = 4.41^{**}$	$F_{(1,164)} = 5.70^*$	$F_{(4,164)} = 5.12^{***}$	$D:T1 > T2^{**}, E:T1 > T2^{***}$ $T2:A > B^*, T2:A > D \cdot E^{***}$ $T2:C > B^*, T2:C > D \cdot E^{***}$
勉強・成績のこと	男	$F_{(4,152)} = 2.44^*$	n.s.	$F_{(4,152)} = 2.67^*$	$C:T2 > T1^{**}, T1:D > A^*$
	女	$F_{(4,170)} = 4.41^{**}$	n.s.	$F_{(4,170)} = 4.16^{**}$	$B:T2 > T1^{**}, C:T2 > T1^*$ $T1:D \cdot E > B^{***}, T2:D > A^*$
将来の進路のこと	男	$F_{(4,154)} = 4.33^{**}$	n.s.	$F_{(4,154)} = 5.79^{***}$	$A:T2 > T1^{**}, C:T2 > T1^{**}, E:T1 > T2^*$ $T1:D > A^{***}, T1:E > A^{**}$ , $T1:D > B^*$
	女	$F_{(4,169)} = 7.99^{***}$	n.s.	$F_{(4,169)} = 2.49^*$	$C:T2 > T1^*, E:T1 > T2^*$ $T1:D > A \cdot B^{***}, T1:E > A \cdot B^{***}$ , $T2:C > A^{**}, T2:D > A^{***}$
心の状態のこと	男	$F_{(4,153)} = 3.04^*$	n.s.	n.s.	$D > A \cdot E^{**}$
	女	$F_{(4,169)} = 3.07^*$	n.s.	n.s.	$E > A^*, C > B^{**}, D > B^*, E > B^{**}$
性格のこと	男	$F_{(4,154)} = 3.80^{**}$	$F_{(1,154)} = 4.14^*$	n.s.	$D > A \cdot B \cdot C^*, D > E^{***}$ $T2 > T1^*$
	女	n.s.	$F_{(1,170)} = 3.91^*$	n.s.	$T1 > T2^*$
身体の調子のこと	男	n.s.	n.s.	n.s.	
	女	$F_{(4,168)} = 2.43^*$	n.s.	n.s.	$E > A \cdot C^*, E > B^{**}$
性に関すること	男	$F_{(4,154)} = 5.09^{***}$	n.s.	n.s.	$D > A \cdot C^{**}, D > B \cdot E^{***}$
	女	n.s.	n.s.	n.s.	

注) \*: $p < .05$ , \*\*: $p < .01$ , \*\*\*: $p < .001$  下位検定のA～Eの記号はグループ名を指している。







## 【まとめと今後の課題】

本研究では、中学生と高校生の悩みの内容と程度について2度にわたる縦断調査を行い、その変化の傾向および悩みの内容毎にクリティカルな年齢段階が確認できるかを検討した。結果として、学業領域に関する領域と心の状態に関しては、課題特有の年齢段階がある可能性が示唆されたが、対人関係の悩みに関しては、年齢要因以外の多様な要因が関与している可能性が考えられた。また、家族関係の悩みに関しても特定のクリティカルな年齢段階は見いだせず、家庭差が大きいのではないかと考えられる。わが国の青年心理研究ではまだまだ横断研究が多く、1度の測定結果に基づく学年差や学校段階差を主張する傾向があるが、様々な領域において縦断データによる実証的研究が必要であることが示唆されたと思われる。

しかし、本研究においては、①サンプル数が少ない、②単一項目による測定のため信頼性が十分ではない、③2時点だけの測定であるためより短期間の変化しか測定できていない、④悩みの変化に関して男女差以外の個人差について検討することが必要である、ことなどが今後の課題として挙げられる。そのため、上記の研究知見は仮説の段階に留まっており、今後のデータの蓄積によって検証していく必要がある。

とりわけ、悩みの変化の個人差については、Compass, Hinden, & Gerhard (1995) が指摘しているように、青年期には複数の発達のパスが存在することが考えられるため、重要な切り口になると思われる。

## 【文献】

- Blos, P. 1962 *On Adolescence*. New York : Free Press.
- Bosma, H., & Jackson, S. (Eds.) 1990 *Coping and self-concept in adolescence*. Berlin : Springer.
- Coleman, J.C. 1974 *Relationships in adolescence*. London : Routledge and Kegan Paul.
- Compass, B.E., Hinden, B.R., & Gerhardt, C.A. 1995 Adolescent development : Pathways and processes of risk and resilience. *Annual Review of Psychology*, 46, 265-93.
- Feud, A. 1936 *The ego and the mechanisms of defense*. New York : International Universities Press.
- Harter, S. 1986 Cognitive-developmental process in the integration of concepts about emotions and the self. *Social Cognition*, 4, 119-151.
- 落合良行 1989 青年期における孤独感の構造 風間書房
- Simons, R.G., & Blyth, D.A. 1987 *Moving into adolescence : The impact of pubertal change and school context*. New York : Aldine.

# A Longitudinal Study on the Psychological Trouble among Japanese Junior High School and High School Students

Kenji Hiraishi\*, Masayoshi Ogura\*\*, Kazuaki Kawashima\*  
Ayumi Suzuki\*\*, Yoko Takamura\*\*, and Ai Hotta\*\*

The main purpose of this study was to test “focal model” proposed by Coleman in 1974. In order to do that, this study examined the critical period of the psychological trouble among Japanese junior high school and high school students by a longitudinal study. Surveys were administered twice at an interval of 14 months.

Participants estimated each seriousness of fourteen kinds of troubles which they were confronting at that time. To test significant differences and changes on the scores of troubles among participants, ANOVAs were used.

As a result, partial critical differences and changes were found in some troubles related to academic areas. On the other hand, no clear critical difference and change was found in troubles related to peer relations and family relations. In the future study, more extensive longitudinal data are needed to confirm this research findings.

---

\* Professor, Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University

\*\* Graduate Student, Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University